

わかる楽しさ 共に学ぶ楽しさを実感させる指導・支援の工夫 ～「文京区特別支援教育推進モデル校」としての取組を通して～

文京区立柳町小学校

1 文京区特別支援教育推進モデル校の趣旨

本校は、特別支援学級設置校として、平成20年度から22年度までの3年間にわたり、文京区特別支援教育推進モデル校の指定を受け、特別支援教育体制の充実を目指して、学校運営や学級運営を確立するとともに、授業改善の在り方についての研究を推進している。

「文京区特別支援教育推進モデル校実施要項」には、本事業における研究の趣旨について、「通常学級における特別な支援のあり方を研究するとともに、特別な支援が必要な児童生徒が、必要な時間のみ個に応じた教育が受けられる制度、いわゆる『特別支援教室』への移行を念頭に置いた諸課題の研究を行うものとする。」と示している。

本校では、本事業の趣旨を踏まえ、研究の前提として、特別支援教育の運営方針を以下のとおり定めている。

2 本校の特別支援教育の運営方針

本校の特別支援教育の運営方針

- すべての児童が、豊かなかかわりの中できるとともに生活できるようにする。
- 個に応じた適切な指導・支援を行う。

◆ 本校では、通常の学級を「所属級」、特別支援学級の児童が個別指導等を受ける教室を「支援教室」と称している。

(1) すべての児童が豊かなかかわりの中できるとともに生活できるようにするために

インクルーシブな教育を目指し、特別支援学級の児童が、所属級の一員として学校生活を共に過ごす時間を多く確保している。

【例】

ア 特別支援学級の児童の机と椅子は、所属級に配置するとともに、ロッカー、靴箱、傘立て等を50音順に配列している。

イ 特別支援学級の児童は、所属級の児童とともに、全校朝会や学校行事等に参加する。

ウ 特別支援学級の児童が、所属級にて朝の会や帰りの会に参加するとともに、日直、給食当番、係活動など、学級でのさまざまな役割分担をしている。

エ 特別支援学級の児童を含むすべての児童が、たてわり班に分かれて、清掃活動等を行っている。

(2) 一人一人の児童が確かな学力を身に付けることができるようにするために、

一人一人の児童に対して、必要に応じて個別の指導や支援を行っている。

ア すべての児童に対して、所属級の担任と支援教室の担任及び特別支援教育コーディネーターが連携して、きめ細かく指導や支援を行っている。「個別の指導計画」を作成し、一人一人の指導に役立てている。

イ 個に応じた指導・支援の必要な児童は、「個別の指導計画」に基づき、一人一人異なる時間割により学習している。教科によって、所属級で学習したり、支援教室（A・B・C教室及び柳ルーム）で個別に学習したりしている。

3 特別支援教育を推進するための指導体制

ア 所属級の担任と支援教室の担任は、協働して学年や学級の年間指導計画及び週ごとの指導計画等を作成し、当該学年全体の児童の指導、支援に当たっている。

イ 児童についての情報交換や授業の打合せを行いやすくするために、職員室では、所属級の担任と支援教室の担任の机を、学年の担当ごとに隣席になるよう配置している。

4 所属級での一斉授業における個別指導・支援の在り方

ア 特別支援学級に在籍する児童が、所属級での一斉授業に参加する場合は、授業中に付き添いの形で支援することのみに終始せず、事前、事後の個別指導の充実、教材（プリント等）の個別化等により、個別のねらいを達成できるようさまざまな工夫をする。

【個別指導・支援の事例】

- 校外学習の行程や見学する場所等について、写真を活用して事前に指導を行い、当日の活動に対して見通しをもたせる。
- 他の児童が授業で使用する学習プリントに比べて、課題を少なくしたり、文字を書くマスが大きいたりしたプリントを個別に用意し、学習に取り組みやすくする。
- 体育のゲーム等について、個別の技能に応じて、ボールを近くから投げてよいこととするなど、児童同士でルールを工夫して、楽しく参加できるようにする。

イ 個別の指導・支援が必要な児童に対しては、必ずしも教師が寄り添って直接支援するのではなく、同学年の児童同士がかかわりながら、学び合うことができるように、意識的に教師が見守る場面を設ける。

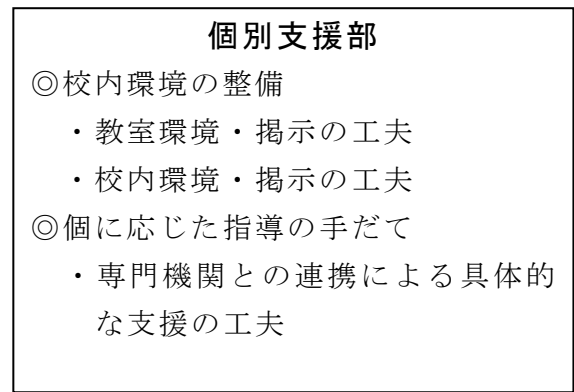
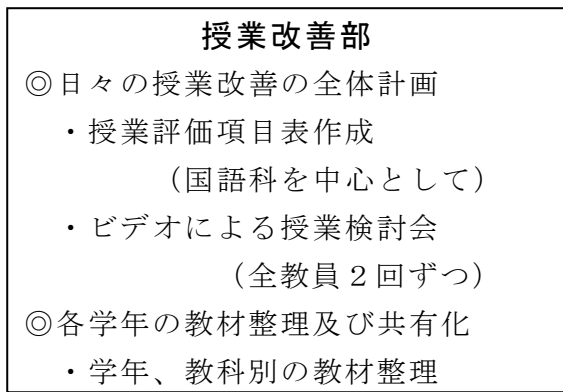
5 研究主題と研究の構想

本校では、先に述べた特別支援教育の運営方針を基盤として、児童一人一人の学習意欲の向上を図り、確かな学力を定着させることを目指して研究を進めることとした。

そこで、すべての児童に対して分かりやすい授業、意欲的に取り組める授業を展開するための指導や支援の在り方を研究の中心にとらえ、研究主題を「できた わかった もっとやりたい やなぎっ子」と定めた。また、多様な人間関係の中で、学び合うよさを追究するため、副主題を「わかる楽しさ 共に学ぶ楽しさを実感させる指導・支援の工夫」とした。

6 研究の視点

上記の研究主題に迫るために、「授業改善」と「個別支援」の2つを研究の視点を定め、全教職員により「授業改善部」及び「個別支援部」を組織し、授業研究を中心に、研究を進めてきた。



7 実践事例

(1) 個別支援の手だて

児童一人一人の課題に応じた支援が、すべての児童にとっての「ユニバーサルな支援」になることを目指した。

◎ 教室環境・校内環境の工夫

【テニスボール】

教室の椅子の足にテニスボールを付けて、椅子を動かすときに音が出ないようにした。これによって、椅子を立つ時や座る時だけでなく、グループの隊形への移動などがスムーズに行えるようになった。これは、音に敏感な児童だけでなく、すべての児童に配慮した「ユニバーサルな支援」の例である。

【傘立て】

自分の傘をどこに入れたか分からない、間違えて持って行ってしまふ、などを防止するために、児童一人一人に対応して、傘を立てる位置を定めた。これにより、児童全員が、自分の傘をしっかりと管理するようになり、傘のトラブルも減少した。



(2) 授業改善に向けての取組

昨年度作成した「授業評価項目表」をもとに、全教員が年間2回ずつ、ビデオで撮影した授業について、全体会や分科会で検討しながら授業改善を図っていった。本年度の授業研究は、国語科を中心に行った。

◎ 日々の授業改善

【授業改善の流れ】

授業評価項目表の活用を通して、具体的な視点をもって日々の授業改善を行う。

2回の授業とビデオによる授業検討会により、自己の課題を明確にし、改善を図る。

授業検討会で出された意見を取り入れ、授業評価項目表をもとにして自己の課題を毎時の授業で改善していく。

授業改善（国語科を中心に）

ビデオで撮影した授業をもとにして、国語科の授業評価項目表を作成する。

多様な人間関係の中で学習することから、互いに「学び合う」ことのよさを追求していく。

専門機関と連携して、具体的な支援の在り方を教員全員で検討し、それぞれの教室で実践していく。

【授業評価項目表】

評価のカテゴリー	授業評価項目
学級経営	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の一定のルールが授業の中で見られる。 ・失敗してもよいという雰囲気がある。
めあて	<ul style="list-style-type: none"> ・学習内容がはっきりしている。
見通し	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の流れや手順が分かりやすい。
意欲（児童の姿）	<ul style="list-style-type: none"> ・意欲的に授業に取り組み、次時の授業を楽しみにしている。 ・「分かった」などと言っている。
指導技術 発問・指示	<ul style="list-style-type: none"> ・明確で分かりやすい発問・指示を行っている。 ・説明は短く、児童の活動の時間をたくさん設けている。 ・教員の声の大きさや速さが適切である。 ・児童のよい発言やつぶやきを授業に取り入れている。
教材・教具	<ul style="list-style-type: none"> ・具体物を使ってイメージさせている。 ・学年・学級の実態に応じた教材・教具を準備している。
板書	<ul style="list-style-type: none"> ・短く分かりやすい言葉で板書している。 ・授業の流れが分かるように整理して板書している。 ・色を変えるなど、視覚的に分かりやすく工夫している。 ・板書計画を立てて、事前に準備している。
学び合い	<ul style="list-style-type: none"> ・学び合える学習形態を設定している。（2人組、グループなど）
場の設定	<ul style="list-style-type: none"> ・学習活動に合った場を設定している。 （人数、学習内容、安全面など）
個への支援	<ul style="list-style-type: none"> ・個に応じた課題や教材・教具を用意している。 ・机間指導をしながら、児童の様子を把握している。 ・児童個人への的確な声かけをしている。 ・個の実態に合わせて、ヒントを出している。

8 これまでの研究から学んだこと

- ア 授業評価項目表を作成したことにより、授業改善の視点が明確になり、教員同士が同じ視点で授業改善について学び合うことができるようになった。
- イ 授業検討会にビデオを取り入れたことにより、よりきめ細やかな授業検討会が行われるようになり、具体的な課題解決につなげることができた。
- ウ 全教員の共通理解のもとに、校内環境の整備が行われ、児童に対して落ち着いた学習環境を提供することができるようになった。
- エ 専門機関との連携により、臨床発達心理士、言語聴覚士、作業療法士、精神科医、特別支援学校支援部の先生方から指導・助言をいただき、具体的な支援方法を学ぶことができた。

9 今後の研究課題

- ア さまざまな方法による児童のアセスメントを、一層充実させる。
- イ 一人一人の児童に対するより適切な支援の在り方を検討する。
- ウ 児童の変容を明確にししながら、授業の検証を行うとともに、更なる授業改善を推進する。